古代日本語の二、三の音韻現象について

村山七郎

一、露出形と被覆形との関係についての一解釈

(一)

乙類エ列音に終る名詞、たとえばカゲ(影)が後続のことばと格助詞「ナ」「ノ」「ツ」をともなったり、伴わずに、合成語をつくるとき、エ列音がア列音として現われる(カガ・ミ)という現象は国語学者や言語学者の注意をひいてきたが、その納得のいく説明はまだ与えられていないようである。

有坂秀世はカゲ(影)を「露出形」、カガ・ミのカガを「被覆形」と名づけた(有坂「国語音韻史の研究」四九頁)。ここではこの用語を用いることにする。彼はこの両形を古代日本語資料からくまなく集めた(有坂「国語にあらはれる一種の母音交替について」前掲三七―四五頁)。左にこれを利用させていただく。私は原文の万葉仮名を片仮名に改めた。また引用は名詞の部分だけにした。

	露出形	被覆形
A. ケ、ゲ、ヘ、メ(以上乙類)	ウケ(食)	ウカ・ノ・ミタマ
	サケ(酒)	サカ・ミヅクラシ、サカ・ミヅキイマス、サカ・ヅキ
	カゲ(影)	カガ・ミ
	スゲ(菅)	スガ・タタミ、スガ・ハラ、スガ・ノ・ネ
	ウヘ(上)	ウハ・ツ・クニ
	メ(目)	マ・モラヒ、マ・ナ・カヒ
	アメ(天)	アマ・ハセヅカヒ、アマ・ト(乙)ブ、アマ・クモ、アマ・ヂ、アマ・カケ(乙)リ、アマ・テル・ツキ(乙)、アマ・テラス・カミ(乙)、アマ・ソ(乙)ソ(乙)リ、アマ・クダリ、アマ・ユク・ツキ(乙)、アマ・ダム、アマ・サクル、アマ・ツ・ミヅ、アマ・ノ・サヅラ、アマ・ノ・サグメ、アマ・ノ・イハクラ、アマ・ノ・ヤソカゲ、アマ・ノ・ミソラ、アマ・ノ・シラクモ、アマ・ノ・ガハ、アマ・ノ・ハラ、アマ・ノ・ヒツギアマ・ゴモリ
ケ、ゲ、ヘ、メ(以上乙類なることの決定的証明なし)	アメ(雨)	
ゼ、テ、ネ、レ		
B. カ、ガ、ハ、マ、ザ、タ、ナ、ラ		

カゼ（風）
テ　（手）

B

タテ（楯）
カネ（金）

フネ（舟）

ムネ（胸）

ウレ（末）
マレ（稀）
キ（乙）、ミ（乙）
チ、ニ、リ（乙類と断定すべき資料なし）
ツキ（月）
ツキ（槻）
ミ　（身）
カミ（神）

カザ・キ（乙）ツワケノオシヲノカミ
タ・コムラ、タ・ビロコス、タ・カミトリシマルタ・エグリ、タ・スキ、タ・ドキ、タ・ヅキ、タ・モト、タ・ニギリモチテ、タ・ヅカヅエ、タ・ナレノミコト、タ・ヲリカザシテ、タ・バサミ、タ・ヂカラ、タ・マクラ、タ・スケヨ、タ・ナ・スエノコシキラヒ、タ・ナ・ソコモヤララニ
タタ・ナメテ、タタ・ナミ
カナ・ヤマビコカミ、カナ・トカゲ、カナ・スキ、カナ・マタ
フナ・アマリ、フナ・ノリ、フナ・デ、フナ・ビト、フナ・ダナ、フナ・ギホフ、フナ・ノ・ヘ
ムナ・ミル、ムナ・サカ、ムナ・ワケユカム
ウラ・バ、ウラ・ワカミ
マラ・ヒト
ク、ム
ツ、ヌ、ル
ツク・ヨ（甲）
ツク・ユミ
ム・カハリ、ム・サネ
カム・カゼノ、カム・ホギ、カム・ガカリ、カム・ホサキホサキキ、カム・カラ、カム・カラヤ、カム・オヤ、カム・サビイマス
イホツ・ツドヒ、イホツ・ツナバフ、イホツ・ト（乙）リタテ、イホツ・ノ・ミスマルノタマ
サツ・ヲ、サツ・ユミ、サツ・ビト
ヌ・ボコ、ヌ・ナ・ト
クル・スバラ
コ（乙）、ホ（乙類と断定すべき資料なし）ト（乙）
コ・クハ、コ・タチ、コ・タカクテ、コ・ノ・マ、コ・ノ・ハ、コ・ノ・ニ、コ・ヌレ、コ・ノ・クレ
ホ・ナカ、ホ・ベ、ホ・ノ・スソリ、ホ・ノ・アガリ
ヲト・ツ・ハタデ、ヲト・ツ・ヒ（甲）

以上のうち格助詞の接尾した形は次の通り。

ノ　ウカ・ノ・ミタマ、スガ・ノ・ネ、アマ・ノ・サヅラ、アマ・ノ・サグメ、アマ・ノ・イハクラ、アマ・ノ・ヤソカゲ、アマ・ノ・ミソラ、アマ・ノ・シラクモ、アマ・ノ・ガハ、アマ・ノ・ハラ、アマ・ノ・ヒツギ、フナ・ノ・ヘ、コ・ノ・マ、コ・ノ・ハ、コ・ノ・ニ、コ・ノ・クレ、ホ・ノ・アガリ

ナ　マ・ナ・カヒ、タ・ナ・スエノ、タ・ナ・ソコモヤラニ、ヌ・ナ・ト

ツ　クハ・ツ・クニ、アマ・ツ・ミヅ、ヲト・ツ・ハタデ、ヲト・ツ・ヒ

C

イホチ（五百箇）

サチ（獲）
ニ　（瓊）
クリ（栗）
キ　（乙）、ヒ（乙）
チ　（乙類と断定すべき資料なし）
キ　（木）

ヒ　（火）

ヲチ（遠）

(二)

新村出はかつてAについては、ア列音（被覆形）をもつて本源的と考えた。

「たけ」（竹）と云ふ言葉と「やぶ」（藪）と云ふ言葉を結付けて熟語にするときは「たかやぶ」となる。単語としては元から「たけ」であるが、それを熟語に組立てるときに「たかやぶ」と云ふ風に音を変ずる。「ふね」と云ふ言葉に「ひと」と云ふ言葉を附けて熟語にするときは、「ふなびと」となる。斯う云ふ風に説明するのが今までの説き方でありました。所が此在来の説は近来になりまして先覚者によって非難されまして、eをaにしたのではない、熟語の中なるaが却って原の形を保存して居る、熟語の中に残って居るaの形の方が古い、「たか」とか「ふな」とか云ふ形の方が単語としても古かった、単語としては一般の音韻変化の勢力の為に支配されてaがeに変って仕舞った、併しながら熟語の場合には其勢力を免かれて原の音で「たかやぶ」とか「ふなびと」とか云ふのであると、斯う云ふ反対の説明を聞くに至りました。私もやはり此新説の方に傾いて居りますが、東語に於ける一例からして今の仮定説を幾分か確めることが出来はしないかと考へます。（新村「国語における東国方言の位置」、論文集「言葉の歴史」一〇九、一一〇頁）

新村は、大和のイヘ（家）が東国ではイハとして現われることまた大和のエリ・フォーム（例えば「行ケリ」）に対し、東国がアリ・フォーム（「行カリ」）を示すことに注意し、アリ・フォームを本源的と考え、またイハを本源的と考えるようであり、これによって有坂の言う被覆形の本源性が幾分たしかめられると考えたようである。しかし特殊仮名遣の研究によって、いまでは被覆形に対応する露出形のエ列音が乙類であることが明らかにされ、これに反し、エリ・フォームのエ列音やイヘ（家）のヘが甲類であることが明らかにされ、従って、東国のアリ・フォームやイハ（家）という語形が被覆形・露出形の説明に何の役にも立たないことが極めて明らかとなったのである。

結局、新村説の土台は、熟語に古形が保存されやすいという可能性である。金田一京助も同じ見解である。

> 酒の酒盛・酒屋・酒樽などでサカとなってゐる。同様に、舟が舟子・舟橋・舟歌、竹が竹藪・竹むら（篁）、苗が苗代、金が金物・金具など、昔の古い形はaであったのが後にeになったので、熟語にa形が保たれて残ったのだと考えられる。（金田一、新訂増補「国語音韻論」二八頁）

阪倉篤義も

> アマ・ツク等が古形でそれが熟語中に保存されたものであると考へる事が出来るのである。（国語学会編、「国語の歴史」二八頁）

とのべているが、新村説と同様である。

熟語形本位説は一方においてはその論拠が弱い。熟語形或いは曲用形幹が本源的な形を保存する保証はどこにも与えられていないし、却って、曲用幹は語末母音に一定の変更を加える可能性もある。他方、熟語形から露出形がどのようにして派生したかについてこの説では全く説明が加えられていない。

次に有坂は露出形と被覆形との母音交替の「発生原因については未だ明らかでないが、恐らくはもとの同一の母音が、語の中程にあるか或は末尾にあるかによって、その発達を異にした結果であらうと思はれる」とのべるのみである(有坂、前掲、六六頁)。言いかえると、本源的語末母音xが本来両形に共通であったが、その置かれた位置が異るため、Aの場合には一方ではaに発達し、他方では乙類エ列音母音に発達したと考えたようである。いずれも多かれ少なかれxからの距離を示すわけである。尤も「被覆形は露出形よりも一層古い時代の語形の面影を存してゐる」(前掲一一四頁)とのべている。しかしその理由はあげられていない。

(三)

ウレ(末)は被覆形においてウラ・バ、ウラ・ワカミとして現われることは前掲の資料に見える通りである。

ウレは末枝 ura-ye から派生したと考えられ(大言海)、この解釈を私は正しいと思う。序ながらウラ ura は音韻的にも意味的にも満洲文語 ura「臀」と同一のことばであらう。さて ura-ye は ura-e〜ura-i に発展したことが考えられる。被覆形 ura は語末母音 a-e〜a-i の e〜i の消滅した形である。つまり、それは収縮幹である。私は ura-ye〉ura-e〜ura-i の発展形ウレ(露出形)を完全幹と名づけ、e(又はi)の収縮した形(被覆形)を収縮幹と名づける。

ウレ——ウラについては少くとも、右のように考えることができる。この考を一般化することができるかは今のところ断定しがたい。ただ僅かではあるが次のような日韓語彙比較から乙類エ列音母音が a-i〜a-e にさかのぼることが推定されるのであって、これをウケ(食)、サケ(酒)、カゲ(影)、スゲ(菅)、ウヘ(上)、メ(目)、アメ(天)に適用すると uka-i〜uka-e, saka-i〜saka-e……が得られる。

日本語	朝鮮語
ヘ(乙)ミ(甲)「蛇」	pe-jam「蛇」
ケ(乙、「日」)	hoi「太陽」
ケ(乙)ヅル「梳、削」	keituri-nta「毀す害する」

被覆形は a-i(又は a-e)の i が収縮した形、uka, saka……である。

合成語に入る場合、或いは格接尾辞が接尾する場合(曲用幹)、この i の収縮が生じたと考えられる。この収縮は乙類エ列音母音が ai に近く発音されていた時代(恐らく奈良時代以前)に生じたのであって、当時にあっては ai に終る完全形(露出形)と i が収縮した a に終る収縮形(被覆形)との関係は全く明瞭であったであろう。

ai の i は安定度の高い母音でなかったので被覆形位置においてのみならず、合成語第二項末に立つ場合にも往々にして収縮したようである。例えば、ヤ・ソ・フナ(八十艘)、ム・ツマ(六爪)、トヲ・カ(十日)のフナ、ツマ、カにおいてそれが見られる。これらは被覆形への類推によって生じたと解するよりも i 収縮が三音節乃至それ以上の音節の語の最後の位置において生じたと解した方が妥当と思われる。

B のカミとカムとの関係においても同じような考察が可能である。アイヌ語の kamuy (日本語とアイヌ語との間におけるこの

ことばの借用の方向は問わない）はカミ（乙）の本来の形を示していると思われる。この最後のiᶜの収縮した形、即ちkamuが被覆形である（また「身」を示すミも古くはmui̯にさかのぼると推定される。朝鮮語mom＜*mum「身」参照）。

Cのキ（乙）―コ（乙）の関係についても同じことが言える。ただここでは問題がやや複雑である。次の二つのことから考慮に入る。

㈠「木」は景行紀で彌開（ミケ）（乙）、万葉で麻氣（マケ）（乙）、バシラ（二十―二十一丁）、マツノ氣（ケ）（二十―三十八丁）とあり、乙類ケでも表わされている。

㈡有坂によると「おもろそうし」や古代の琉球金石文で

ウチ（内）クチ（口）カミ（神）などの末尾の音節はいづれもイ列音の仮名で写されてゐるのに、キ（木）オリ（下）などは到る処ケ、オレとなってゐて、キ、オリとなってゐる所は殆ど見当らない。（もっとも樟などはクスヌキとなってゐる。）（有坂、前掲、六九頁。「木」が古い琉球語でkēであるのにクスヌキのみkīであるのはkēの前の凡ての音節の狭い母音の影響の故であろう。）

そこで次のように考えられる。「木」をあらわす日本語に乙類キ（kïi̯）と乙類ケ（kei̯）との両形があり、前者からキが発達し後者から「木」の曲用形、熟語形コ（乙）や「おもろそうし」のkēが発達した。

kïi̯＞kī＞ki（日本語）

{kei̯＞ke̯－＞kö－（被覆形）
{kei̯＞kē（おもろそうし）＞kī（琉球語）

同じことはヒ（火）についても言える。ヒは誉母都俳遇比（ヨモツヘグヒ）（神代紀）の俳（乙類）が示すようにヘ（乙）と交替する。即ち「火」を表わすことばとしてfïi̯～fei̯が存した。前者はヒ（火）に発達し、後者は合成語において残っている。

fïi̯＞fī＞fi

fei̯＞fe̯－＞fö－（合成語形，曲用形幹）

同じことは「背」を表わすセにも見られる。

*sei̯＞sē＞se

*sei̯＞se̯－＞sö－（合成語形）

（序ながらメ、ケ乙類とミ、キ乙類との交替の例として次のものがある。

都麻碁微爾（ミ乙）（記）――莵摩語味爾（メ乙）

許紀志悲恵泥（キ乙）（記）――居氣儴被恵禰（ケ乙）

（四）

以上のように露出形、被覆形の関係を考えると、有坂が両形の母音交替を「インドゲルマン語のAblautにも比すべきものである」（有坂、前掲、六六頁）とのべているのは、妥当でないと言わざるを得ない。インドゲルマン語のアプラウトは、iᶜをそなえた語末母音と、iᶜを失った語末母音とからそれぞれ発達したところの母音「交替」とは全然別個のものであって、もしインドゲルマン語の中にこれとやや類似した現象をもとめるとしたら、Auslautsgesetzである。これについはやがてふれる機会があるであろう。

二、古代日本語における母音の後進的影響

―ハルカ―ハルケ・シの関係の解明―

「カ」に終る三乃至四音節副詞幹、例えばハルカ、アキラカに「シ」(形容詞終止形)、「キ」(形容詞連体形)が接尾したとき、「カ」が「ケ」乙類に転化するという法則がある。これは橋本進吉により「上代の文献に存する特殊の仮名遣と当時の語法」(一九三一年)という論文の中で指摘された。橋本は次のようにのべる。

> 「か」で終る副詞の語幹が形容詞の語尾に附く時「か」から転じた「け」気　(乙)
>
> 例　ハルカ|シ　ハルケシ　ノドカ|シ　ノドケシ
>
> (橋本進吉博士著作集第三冊、一七七頁)

この転化の現象を示す言葉は次の通り。

語幹	接尾辞「シ」	接尾辞「キ」	接尾辞「ク」
ハルカ	ハルケ・シ		
シヅカ	シヅケ・シ		
アキラカ	アキラケ・シ	カソケ・キ	
カソカ		サヤケ・キ	サヤケ・ク
サヤカ		ユタケ・キ	
ユタカ			スムヤケ・ク
スムヤカ			タヒラケ・ク
タヒラカ			ヤスラケ・ク

しかるに「カ」に終る二音節形容詞幹に接尾した場合「カ」↓「ケ」(乙)の転化は行われない(この事実に私の注意を向けてくされたのは池上禎造教授である)。

形容詞幹	接尾辞「シ」	接尾辞「キ」	接尾辞「ク」
アカ	アカ・シ	アカ・キ	
タカ	タカ・シ	タカ・キ	
ナガ	ナガ・シ	ナガ・キ	
フカ	フカ・シ		フカ・ク
ワカ	ワカ・シ	ワカ・キ	

前者においては転化が生じ後者においては生じないのはどういうわけか。

乙類エ列音母音は中舌のエ、即ちə(或はそれに音節を担わないiのついた母音)と考えられている。

前述の転化は次のように転写される。

faruka	farukəsi
sidura	sidukəsi
akiraka	akirakəsi
kasoka	kasokəsi
.....	.....

a∨ə という転化をひき起した原因として次の二つがある。

(一) 語幹が三―四音節の長さを有すること(二音節幹では転化が生じない)。

(二) 接尾辞が狭い母音をふくむこと(「シ」、「キ」、「ク」)。

(一)がなぜ転化の原因となるかと言えば、第三・四番目の音節に

立つ母音は、減じられた力を以て発音され、他の母音の影響をうけやすくなっているからである。「国語の音節は」――と橋本進吉はのべる――「発音に於てもその初頭に力を込め終に近づくに随って力を減ずるのが常であり、之を聞くものにとっても、その最初が大切であって、そこで如何なる音であるかを識別するのであって、母音の最後の部分は比較的重要でないのであるが、語全体として見れば最後の音節の最後の部分は軽く発音される傾向があり、殊に三音節以上の語に於ては最後の母音は多少曖昧であっても、その意味を解するに支障を生じない事が多い。」（橋本、著作集Ⅳ、二四六頁）語末母音の弱化に関するこの見解は妥当であり、前述の転化の現象の説明に役立つ。二音節幹アカ、フカ、タカ、ワカの語末母音aにくらべると、三―四音節幹末母音は弱まっており、それだけ後続接尾辞の母音の影響をうけ易くなっている。二音節幹末母音はかかる影響をはねかえす力をもつ。

三―四音節幹末の弱化した母音に対する狭い母音i、uの影響のもとに ka〉kə の転化が生じたと推定される。

一見、次の事実はこの説明の正当さを疑わしいものとなすかの如くである。

二音節以上より成る語幹に狭い母音iをふくむ接尾辞「ニ」が附されるとき、右の転化は生じない。

オホロカ　オホロカ・ニ

サヤカ　サヤカ・ニ

この場合、幹末母音の弱化については上述と同じ筈である。ただこの弱化した母音に働きかける「ニ」niのiが「キ」や「シ」のような力をもっていたかが問題である。「ニ」の影響力の弱かったことについては次の点から判断できる。

古代日本語に二つの母音iとaとが何らの子音を介することなく接するとき、甲類ケ、ヘ、メ母音が生ずる。

行キ・アリ→行ケ（甲）リ

思ヒ・アリ→思ヘ（甲）リ

淀ミ・アリ→淀メ（甲）リ

しかるに「ニ」に「アリ」が接尾したとき「ネリ」が現われないで「ナリ」が現われる。「ニ」の母音iは「アリ」のaによって常に排除される。これは「ニ」のiが弱かったことを証明する。

従って「ニ」の接尾が「カ」→「ケ」（乙）の転化をひき起さなくても、前掲の説明が否定されるわけでない。

後続音節母音が先行音節母音に対して及ぼす影響は決して珍らしくない。

ワゴ・オホキミがそれである。waga-*öfö-kimi〉wagö-*öfö-kimi（オホが陰性幹であることはオホロ（乙）カによって示される）。金田一京助はこの言葉のうちに「最も古く見える溯行同化」（国語音韻論、一四五頁）を見出しているのは正当である。

ヨヒ（宵）yöfi も「夜」yo との関連からみて、yofi〉yöfi という発達が考えられる。允恭紀では yöfi（臏臂）、万葉では yöfi（与比）（十四―八、二十、二十―三四）と yofi（欲比）（十五―十五）である。ヨヒの前にaをふくむ音節が二つ来る場合、即ちアサヨヒのときは四例（十七―四十、四十三、二十―五）は yofi であり、一例（十八―二十六）は yöfi である。これに対して kö（此）が先行するときは何れも kö-yöfi である（允恭紀、万十四―十九、二十、二十一、二十六、三十四、十八―十三、二十―五

十七)。

他方、「夜」yo に古事記(景行)に用(甲)、万葉に用、欲(甲)とあり、「夜」yoru は万葉に用流、欲流とあり、何れも yoru と転写できる。ただ万葉七—三に與曾(夜ソ) yo-sö とあり、これは sö の ö の後進的影響によって説明される。

コヨミ(暦)は和名抄に古與美とあるが、これも ka-yömi〉ko-yömi という発達によって生じた形ではないかと思われる。

三、古代日本語の a—ö の交替について

有坂秀世は古代日本語におけるエ列音(乙)——ア列音、イ列音(乙)——ウ列音、イ列音(乙)——オ列音(乙)の母音交替を論じた。この交替の本質はしかしインドゲルマン的アプラウトと比較さるべきでなく、その成立の事情は案外簡単のように思われる。(「露出形と被覆形との関係についての一解釈」参照)。また有坂は古代日本語の音節結合法則を取扱った論文の中で格助詞 nö と na とが幹母音に依存して用いたであろうという推定を下し(有坂「国語音韻史の研究」一〇九頁)ているが、これはアルタイ系諸語における母音調和の現象に類している。また「アカラ・ケシ」に対する「オホロ(乙)カ」のうち見られる a—ö の対立にも着眼している。ただ有坂は「ö—a 交替」という法則はみちびき出さなかった。大野はこの問題に関する資料をくまなく集め、a—ö 交替法則(「母音法則D」)をみちびいている(大野晋「日本語と朝鮮語との語彙の比較についての小見」国語と国文学、昭和二十七年五月号。大野晋「日本語の動詞の活用形の起源について」国語と国文学、昭和二十八年六月号。以下、前者を大野A、後者を大野Bと異称する)。

大野は ö と a との間には「次のような母音交替による語構成法が見出される」(大野A、四八頁)となして後掲の三十四の例をあげる。

さて、a—ö 交替による「語構成法」に言及されており、a—ö 交替が「母音法則D」と呼ばれているところから見て、この交替はわれわれの推定し得る条件でひき起された音韻変化の結果生じた交替とは解されていないようである。

ある言語において音韻の点でも意味の点でも近い諸語形が見出されるとき、われわれはそれら諸形の内部関係を明らかにしようと努める。例えば、ドイツ語 Macht「力」と mächtig「力強い」とは意味も語形も近いので、a と ä とがどんな関係にあるかを究め、幹母音 a が接尾辞 -ig の i によって影響を受け ä に発達したことを知る。即ち i-Umlaut としてわれわれは ä をもつのである。これはわれわれの知り得る条件によって生じたのであって、ドイツ語の gab「与えた」と geben「与える」とにおける幹母音 a—e の交替(アプラウト)とは本質的に異る。また蒙古語(文語)で「馬」は morin であるが、カルミュク語(西蒙古語)で mörn として現われる。これも i-Umlaut によって説明される。これらの場合、ドイツ語における a—ä、蒙古語における o—ö の交替は派生的である。

大野のあげる例は本源的な「母音交替」によって生じたものであろうか。

(1) ama-damu, ama-töbu(天飛)は ama-töbu〉ama-damu と推定することが許されるであろう(前進同化)。(2) yorasi, yörösi

(1) amadamu, amatöbu（天飛）
(2) ana, önö（間投詞）
(3) ana, önö（己）
(4) are, öre（己）
(5) asa, ösö（浅愚）
(6) fadara, *födörö（斑）
(7) fidari, fitöri（一人）
(8) ika, sikö（厳，醜強）
(9) ira-(tu-me), irö-(ne)（血族）
(10) ira-(tu-ko), irö-(se)（血族）
(11) ita, itö（甚）
(12) iya, iyö（彌）
(13) ka, kö（彼，此）
(14) kara, körö（自・獨）
(15) karu, köru（刈）
(16) kata, kötö（片・獨）
(17) kata, kötö（言・事）
(18) kawara, köwörö（擬音語）
(19) kikasu, kikösu（聞くの敬語）
(20) masaki, masöke（幸）
(21) na, nö（自・汝）
(22) na, nö（助詞）
(23) namu, nömu（祈る）
(24) nasu, nösu（如す）
(25) ra, rö（助詞）
(26) sa, sö（其）
(27) satu, söti（矢）
(28) sayagu, söyögu（亂）
(29) tanabiku, tönöbiku（棚引）
(30) tanagumori, tönögumori（棚雲り）
(31) tawawa, *töwöwö（撓）
(32) ya, yö（助詞）
(33) yörasi, yörösi（宜）
(34) yösadura, yösödura（吉葛）

についても同じことが言えるであろう(yörasi>yörösi)。(34) yösadura, yösödura についても言えると思う(yösadura>yösödura)。(20) masaki, masöke の第二音節の母音の交替も、第三音節の狭い母音の影響による成立の疑いがかけられてよい。(9)、(10)の ira-(tu-me), irö-(ne), ira-(tu-ko), irö-(se) についても同じような疑いがかけられ得る。即ち、セ、ネの母音が ira の a に働きかけて irö が派生したのではないかと思われるのである。また(29)、(30) tanabiku, tönöbiku (棚引)、tanagumori, tönögumori (棚雲り) においても母音の後進的影響が疑われないことはない。殊に合成語に入らない場合における tönö という語形が実証されない限りこの疑問をかきけすことはできまい。

以上の例語によって a—ö 交替による「語構成法」を確実に実証することはできない。

また(5) asa (浅) と ösö (愚) とがはたして同一語の二つの交替形と見ることができるかどうか。同じ疑問は(16) kata (片)、kötö (独) についてもいだかれる。(序ながら kata は音韻的にも意味的にも蒙古語 qaltas「半分」、ツングース・ソロン xaltaxa「一対のものの片方」、ツングース・バルグジン kaltaka「半分」に対応する)

次の例は注目される。

(イ) 助詞 (22) na, nö (有坂、前掲、一〇九頁参照)
(25) ra, rö (32) ya, yö
(ロ) 先行語と密接な結合を示す動詞 (24) näsu, nösu
(ハ) 動詞形 (19) kik-a-su, kik-ö-su
(ニ) 擬音語 (18) kawara, köwörö
(ホ) 擬態語 (6) fadara, födörö, (28) sayagu, söyögu, (31) tawawa, töwöwö (saya-saya, söyö-söyö; tawa-tawa, tö-

wö-töwö 参照)

(ヘ) 間投詞 (2) ana, önö

(ト) 副詞 (11) ita, itö

(イ)、(ロ)、(ハ)はもともと語幹母音の前・後、即ち語幹が陽性幹か陰性幹かと関係あるらしい。(19)のキカス、キコスについて言えば動詞幹 kik- が(iが中立母音なる故)陰性幹とも陽性幹ともとられ得たことを示しているように見える。

(ニ)、(ホ)、(ヘ)、(ト)も興味がある。a—öの対立が音声絵画的に活用されていることがここに示される。擬音語、擬態語に見られるa—ö交替は満洲語の左記資料と非常に似ている(後に見るように、アルタイ系言語のe母音は日本語ではöとして現われるのであるから、満洲文語のa—e交替に対応するのは日本語のa—ö交替である)。

a—ö交替による同一名詞幹、動詞幹の諸変種と目さるべきものの確実な例は案外少ないと思われる(但し karu, köru, kiru「刈、切」テ(甲乙の別あれば乙の筈)「手」とト(乙)ル、メ(乙)「眼」とミ(甲)ルとに見られる母音交替は興味深い)。

古代日本語における乙類オ列音母音はöと転写されることが多いが、この母音は中舌母音であったことは確かなようであるが、どの程度円唇性をおびていたかは明確でないようである。この母音はツングース語e)(ソロン語のeはやや円唇的。ネギダルもやや円唇的か)、満洲文語e、蒙古語eに対応するところから見て、少くともその一部はeにさかのぼることは疑われないのである。

更に朝鮮語eと日本語乙類オ列音母音が対応するようである。

debe daba	うじゃうじゃ(蛆が群ったさま)
dede dada	そわそわ(立っそり坐ったりするさま)
fere fara	ひょろひょろ(病弱で無力のさま)
ge ga	がやがや(相争うさま)
gebge gabge	よろよろと, よちよちと(小児の歩くさま)
gerben garban	ぞろぞろ, ごそごそ(蜘蛛などの様に足の多い虫が匍うさま)
her har	ごろごろ(喉に痰がまつわるさま)
keb kab	親しみ近づくさま　ぐったりと(大いにつかれたさま)
keleng kalang	のそりぶらり(閉散怠惰のさま)
keler kalar	ぶらぶらと
kete kaka	かたかた(馬蹄の石をふむ音)
ketek katak	がたがた(平坦ならざるところで馬のゆれる音)
pekte pakta	はらはら, びくびく
serben sarban	うじょうじょ
tek tak	がやがや
tete tata	そわそわと, ちょこちょこと(挙動におちつきないさま)

古代日本語	朝鮮語	ツングース語	満洲文語	蒙古語
ömö＜*emu「面，陽，重」	emǯi-sonkkarak「親指」	emũ（ソロン）「1」	emu「1」	emün-e「前方，胸，南」
		umun＜*emun（バルグジン）		
		umen～emen（エウェン）		
ömö＜*eme「母」	eme-nim「母」		eme「母」	eme「婦人」
göm-＜*gem-「妻を迎える」			ge-「嫁をめとる，女を聘する」	
yörö-du＜*yere-du「万」	yere「多」	yerẽ「90」（ソロン）		yeren「90」
kökörö＜*kekere「心」		xeŋer「胸」（ソロン）	kenggeri「屠殺した獣の前半身」	xeŋxĕrĕk「同」（ハルハ）
förö-bu＜fere-bu「亡」			fere-「古くなる，古びゆく」	
köwe＜*gebē「声」		gerbi「名」（ソロン，バルグジン）	gebun「名」	
		gerbe（エウェン）		
sö-＜*se-「為」			se-「言う」	
tö-m＜te-m「止」			te-「坐る，腰を下す，住む」	
tökö＜*teke「床」			tehe「台」	
fötö＜*fete「女陰」			fefe「女陰」	
（但し，fötö は蒙古文語 ütügün＜hütügün＜*pütügün と比較さるべきか？）				
fitö＜*fute「人」		hute＜fute「子供」（バルグジン）		
		ute＜fute（ソロン）		
		utö＜fute（ネギダル）		

Labial の附近における u＞i についてはツングース lamu「海洋」，満洲語 namu「海洋」に対する日本語 nami「波」，ツングース namukta「涙」に対する日本語 namita「涙」を参照せよ。更に「ソラ・ミツ・ヤマトノクニ」のソラ・ミツは不明の語とされているが，満洲語 sula mutun「曠大な，寛さ」に対応すると思われることを指摘しておきたい。

日本語	朝鮮語
kötö〈*gete「事」	get「事」
sö〈*čẹ「其」	čẹ〈tye「あれ」
örö-ka〈*ere-ka「愚」	eri-「幼稚」
kösi〈*kesi「腰」	heri〈*kesi「腰」
sömu〈*čemu「始」	če-im「始」

アルタイ系諸語における母音調和の現象において重要な役割を演ずるa－e交替が古代日本語においてa－ö交替として反映されているのである。

序ながら日本語がアルタイ祖語から受けとった*eは残りなくöに転化したと思われるが、*ēや*ei〈や*ie〈などは古代日本語においてエ母音として保たれているように見えることを指摘しておきたい。この点についてはふれる機会があることをのぞむ。

—順天堂大学教授—